健さんとの出会いが、役者への道を切り拓いてくれた。

木村政雄編集長スペシャルインタビュー

石倉三郎

俳優

「サブちゃん、潮が満ちてきたようだね」

今年、古希を迎える俳優・石倉三郎は、高倉健さんに掛けられたその言葉を忘れない――。

貧しかった少年時代、母親が勤める映画館で、来る日も来る日も、喜劇を観ていた。

スクリーンの中で跳びはねる三木のり平や植木等に、唯一、希望の光を見ていたのだろう。

役者という運命の海に漕ぎ出して五〇年。豊かな満ち潮に、石倉の渋い演技が光っている。

木村　石倉さんと同い年なんですよ。五月生まれで、私の方が一足お先に七〇の大台に乗りました。

石倉　こっちは一二月生まれですから、もうしばらく六〇代です。しかし、古希ですねぇ。

木村　杜甫のいう「古来稀なり」という年になりましたね（笑）。石倉さんとは生まれ育った時代が同じということで、以前から親しみを感じてきたんですが、確か、最初にお会いしたのは、関西テレビ制作の『花王名人劇場』でしたね。

石倉　一九八〇年代前半の漫才ブームの頃、木村さんが吉本興業の東京進出の先頭に立っておられた熱い時代でしたね。

木村　石倉さんこそ「コント・レオナルド」として大ブレークされて、まさに、漫才ブームの一翼を担っておられました。その後、俳優に復帰され、今年で芸能生活五〇周年になられたわけですね。主演された映画『つむぐもの』が話題を呼んでいます。ここに至るまでには大変なご苦労がおありだったことと思いますが、その辺りからおうかがいしましょうか。

石倉　僕の両親は、もともと大阪で仕出し弁当屋をやっていたんですが、昭和二〇年の大阪大空襲で焼け出され、小豆島に縁故疎開したんです。そこで僕が生まれ、中学一年まで暮らしていました。終戦間もない時代で、日本中が貧しかったといいますが、わが家の貧しさは別格でしたね。

木村　具体的には、どのような少年時代だったんですか？

石倉　小学校も、よくぞ卒業させてくれたなと思うくらい、学級費とか給食費とか払えなかったんです。当時は子どもの気持ちなんてお構いなしに、お金を持ってこない子どもを、先生が皆の前で出席簿順に名指しする。それが恥ずかしくて嫌で……月に一回、子供心に切ない思いをしていました。唯一、楽しかったのは映画で、年の離れた長兄が映画館で映写技師をやっていて、お袋が、そこのチケット売り場で働いていたので、毎日のようにタダで映画を観て育ちました（笑）。

木村　日本映画が輝いていた時代ですよね。

石倉　ま、田舎の映画館ですから、日替わりの三本立て。小学校の六年生ぐらいだったか、そろそろ生意気になってくる頃、東宝の「社長シリーズ」が大ヒットして、三木のり平さんに、もう、夢中になったんです。

木村　社長シリーズというと、森繁久彌さん主演の喜劇映画シリーズですね。高度成長期の企業を舞台に、浮気者の森繁社長に、三木のり平さん演じる宴会好きの営業部長らが絡んで巻き起こす、てんやわんやのサラリーマン喜劇でした。

石倉　そうそう。うちは貧乏だし、当然、上の学校に行く金もないし。で、将来は漠然と、のり平さんのような俳優になりたいなと思ったんです。

木村　なるほど。小学校時代から役者を志しておられたんですね。

石倉　というか、直感ですね。もう一つ、忘れられない思い出が小学校の卒業式の謝恩

石倉三郎（いしくら・さぶろう） 1946年、香川県小豆島町生まれ。俳優、コメディアン、タレント。本名＝石原三郎。芸名は俳優・高倉健から1字をもらって「石倉」に。中学2年生のとき大阪市鶴見区に転居。卒業後、工場勤務などを経て、俳優に憧れ上京。1967年、高倉健の紹介で、東映東京撮影所の大部屋俳優になり、任侠映画などの端役を務める。1972年、東映を退社。舞台に転向し、1980年、故レオナルド熊と「コント・レオナルド」を結成、折からの漫才ブームに乗り、一世を風靡する。1983年ゴールデン・アロー賞芸能賞、1984年花王名人賞を受賞。1985年、コント・レオナルドを解散し、俳優に復帰。映画『四十七人の刺客』に出演して以来、市川崑監督の作品に出演するなど名脇役として活躍。近年は渋い中年男性役で多数の映画、ドラマ、舞台に出演している。2016年、犬童一利監督作品の映画『つむぐもの』で初の主演。著書に『粋に生きるヒント』（ロングセラーズ）など。

会。お世話になった先生方や親に、卒業生が舞台で何か演じるという企画があって、クラスでも一、二番の秀才が「サブちゃん、俺と一緒にマジックショーをやろう」と誘ってきたんです。「人前で何かやる？　冗談じゃない」と断ったんですが「サブちゃんは面白いから」って無理やり引っ張り出されたところ、めちゃくちゃ受けましてね。先生や親たちが、僕を見て大笑いしている。貧乏で、いつも小さくなっている自分でも、平等に笑ってくれるんやと、うれしかったですねぇ。

中学二年に上がるとき、大阪に引っ越したんですが、大阪でも、学級費も給食費も払えない。小豆島の学校と同じように、出席簿順に名前が呼ばれる、嫌だなと思ったそのとき、僕の前の出席番号のアズマって子が「先生、義務教育で金取るって何やねん。ワシは貧乏やねんからな」と堂々とツッコミを入れた。すると教室中が大笑い。貧乏がギャグになるのかと、ウワーッと鳥肌が立ちました。

僕はエエ所へ来たなあ。さすが大阪やなあと、意識がいっぺんに変わりました（笑）。

木村　アハハハ。大阪の笑いやギャグが、少年の抱いていたコンプレックスを吹き飛ばしたんですね。よかった、本当にいい所へ来ましたね。

貧乏、中卒、小柄。マイナスを乗り越え役者になる覚悟を決めた専務の一言

木村　でも中学三年になると、進路の問題に突き当たるでしょう。

石倉　わが家は貧乏ですから当然、僕も就職組だったんですが、中卒で、どうやって食べていったらいいのか分からず悶々としました。手品師かコメディアンか、就職するならネクタイを締める営業マンになりたかったんです。そんなグズグズしている僕を見て次兄がシビレを切らして、自分が勤めているポンプ会社に頼んで、工場に入れてくれたんです。僕の唯一の取柄は真面目さだと思うんですが、無遅刻無欠勤で、工場勤めも三年目という、ある日、専務に呼ばれ「名古屋の営業所で営業マンを一人欲しがっとる、営業マンで頑張ってみないか？」と言われたんです。びっくりして「僕は中卒で頭も悪い、そんな自分に営業の仕事ができますか？」と聞いたら専務は「学歴なんか関係ない。要はやる気があるかないかや。君は普段から真面目で根性がある。それに宴会などで面白いことをやって周囲を楽しませているじゃないか」と言ってくれたんです。「僕、そういう素質、ありますか？」「あるよ！」。その一言で「役者になる」と決めたんです。

木村　せっかく憧れの営業マンになれるというのに、会社を辞めて役者になろうと思ったんですか？

石倉　会社の偉い人が冷静な目で僕の素質を認めてくれたので、逆にそれなら夢に賭けてみようと決心したんです。その場は「一晩考

えます」と言って帰りましたが、腹は決まっていました。兄貴は、弟の名古屋営業所への大抜擢を知って、帰宅後一番に「よかったな！」と喜んでくれたんですが、僕が「会社を辞めて、役者になる」と宣言したものだから、「縁を切る」とまで言われてしまいました。一方で、親父は若い頃に鈴木傳明という映画スターの弟子になると言って、東京に出奔した人ですから、「ま、頑張れよ」なんて能天気に励ましてくれました。血は争えないですねぇ（笑）。最終的には兄貴が「お袋に仕送りをする」ことを条件に、許してくれたんで、それでしばらくの間、大阪で働いてお金を貯めて東京に行くことになったんです。

木村　小学生の頃から新聞配達をしたり、本当によく働きましたね。

石倉　中学校では、朝刊配って、牛乳配って、夕刊配って、米屋のバイトですから四つを掛け持ちしていました。このときも、喫茶店、バー、消火器製造会社と、いろいろやって成人式を済ませたところで、ある劇団の二次試験に合わせて上京したんです。

木村　夢の実現に向かって、意気揚々と東京の地を踏んだわけですね！

石倉　ところが、その劇団の面接に行くと「バイトは一切認めない」と言われたんです。がっかりでした。憧れの三木のり平先生の家の前にも何度も立ったんですが、どうしても玄関チャイムを押せませんでした。もし弟子入りが許されても、バイトは、まず無理でしょう。僕の場合、どうしてもお袋に仕送りができなければダメだったんです。

木村　予定が狂って、さぞかし不安だったでしょうね？

石倉　仕事が見つかるまでの一カ月は大変でしたが、何とか新宿の最中（もなか）屋さんに拾ってもらうことができて、そこに住み込みで働くことができました。最中のあんこを練っていると、パートのおばちゃんたちが「兄ちゃん、俳優になるんだって？　だったら、こんな所で最中を作っていたって仕方ない。東京には青山って、スターがいっぱい歩いている所があるから」と教えてくれた。そこで、青山の深夜スーパーのレジ打ちになり、休憩時間に近所の喫茶ＶＡＮでコーヒーを啜（すす）るのが日課に。スーパーには石原裕次郎さんが来るわ、ＶＡＮには高倉健さんが来るわ……おばちゃんたちの話は本当だったんです。

木村　芸名に、一字をもらったという、運命の出会いですね。

石倉　はい。ＶＡＮでいつものようにコーヒーを啜っていると、健さんが毎日のようにいらっしゃる。そのうち名前を覚えてくださり、あの声で「よう、サブちゃん、こんばんは」って声を掛けていただいたんです。もう、頭がシビレて、しどろもどろに。そしてある日、「サブちゃん、俳優目指してるんだって？　ここのママに聞いたけど。じゃあ、東映においでよ。僕が紹介してあげるよ」。こうして東映東京撮影所の大部屋俳優になることができたんです。二〇歳の終わり頃でしたね。名前の一字というのは、僕の本名は石原。撮影所に同姓の人がいたのでややこしいと言われ、健さんの「倉」をいただいて、石原三郎から石倉三郎になったんです。

木村　大部屋俳優って大変な世界でしょう。いろいろご苦労があったんじゃないですか？

石倉　一日でも先に入ったほうが先輩で、下の者が雑用をするんです。衣装も、ワイシャツも靴下も、前の人が着たもの。ワイシャツは汗で湿っているし、靴下は臭い。仕事はいわゆる「仕出し」（エキストラ）で通行人とか店の客とかばっかりでした。でも『網走番外地』のロケに参加できた時にはうれしくて、みんなに手紙を書いて知らせました。

木村　当時の出演料は、いくらくらいだったんですか。

石倉　五〇〇〇円から七〇〇〇円くらい。あの当時は、一カ月に東京と京都の撮影所で二本ずつ映画を作っていましたから、けっこうな実入りがありました。

木村　大阪を出て都合十年間、仕送りを続けられたそうですが、仕送りをするには安定収入があった方がいいですよね。

石倉　だけど、大部屋俳優を長くやっていると、大部屋の垢がつくというか、セリフもないし、クズのような扱いで仕事に誇りが持てない。理不尽なイジメが渦巻いている……。ついに僕は大部屋の事務担当者を殴ってしまい、その結果、仕事を干されて四年で辞めることにしたんです。紹介していただいた健さんに言うのが本当に辛かったですね。

運に身を任せて、役者の仕事に還る
「サブちゃん、潮が満ちてきたな……」

木村　昔から喧嘩っ早かったんですか？

石倉　仏の顔も五度か六度くらいは我慢できるんです。もともと人見知りの気の弱い人間ですから。でも七度目は無理。切れてしまうんです。

木村　東映を辞めて、仕事はどうされたんですか？

石倉　商業演劇の俳優を四年ほどやりました。端役ですけどね。その後、一年ほど、芸能界から離れていたんですが、歌手の坂本九さんから、専属の司会を頼まれて、二年間ほど活動を共にしました。九さんからは、マネージャーになってほしいとも言われたんですが、僕はやっぱり役者になりたいということでお断りしたんです。

木村　その次が、大ブレークした、コントですね。そうやって次々に声が掛かるのは、やっぱり石倉さんの持っていらっしゃる人徳なんでしょうね。

石倉　有り難いですね。母親が「人の話にはのってみるもの」とよく言っていましたが、本当です。コントの世界に入って、ビートたけしさんと飲むようになったり、仲間がまたぐんと増えました。レオナルド熊さんから相方を頼まれて始めたのが「コント・レオナルド」。熊さんによれば、二〇〇人目の相方だとか。あの舞台で、僕はお客に「受ける」喜び、本当のプロとしての感動を、初めて味わうことができました。

木村　コント・レオナルドは、本当に面白かったですよ。

石倉　ネタをつくるのも必死で、真剣勝負でしたからね。

木村　当然、収入も上がってきたでしょう。

石倉　上がりました。ワンステージ一二〇万円。前年の年収が四〇万ですから、お金をどうやって使ったらいいか分からなくて、困りましたよ。

木村　しかし、残念ながら人気絶頂のときに解散されました。

石倉　熊さんは非常に才能のある人でしたが、例えば、コント・レオナルドの持ちネタを、勝手に自分のお弟子さんと、テレビで演じたりするんです。事務所の社長が何度意見しても同じことがあって、別れようというこ

「つむぐもの」
出演：石倉三郎、キム・コッピ、吉岡里帆、
森永悠希、宇野祥平、内田慈、日野陽仁
監督：犬童一利
配給・宣伝：マジックアワー
後援：公益社団法人 全国老人福祉施設協議会
厚生労働省タイアップ作品
2016/ 日本 / カラー/DCP/ ヨーロピアン・ヴィスタ /
5.1ch/109 分

©2016「つむぐもの」製作委員会

とになりました。

木村　結局、熊さんとは何年一緒にやられたんですか？

石倉　コンビを組んでから四年、売れてからは二年でした。

木村　あのエンタツ・アチャコの名コンビでも三年ですから、いい頃合いだったんじゃないですか。お笑いで売れているときも、将来は役者で行こうという気持ちはあったんですか。

石倉　ありました。やすしきよし、オール阪神・巨人、ツービート……漫才で人気者になった人たちは、根っからのお笑いで培った土壌がありますが、僕には、そういう土壌は無いんです。僕は映画が大好きで、映画にどっぷり浸かったところから来ているんです。これは決定的に違うなと思いました。

木村　役者としての活動を再開されたとき、それまでとは違ってテレビで顔が売れている分、やりやすかったということはあったでしょうね。

石倉　そうですね。今度はセリフもあるし、ちゃんと役もついていました。第一、ワイシャツも靴下も、人の垢がついたものじゃなく、きれいなものを着せてもらえる（笑）。俺もやっとここまで来ることができたかと思いましたね。

木村　ドラマで見る石倉さんって、職人さんや大工さんといった役どころが多いイメージがあるんですが？

石倉　そう、ナッパ服が似合うみたいですね。NHK連続テレビ小説『ひらり』（一九九二年）で、ヒロインの叔父・銀次役でレギュラー出演をさせていただき、それが終わって、市川崑監督から『四十七人の刺客』（一九九四年公開）のオファーをいただきました。東映を辞めて以来二三年ぶりに健さんと一緒に仕事をさせていただいたんですが、撮影所の楽屋に挨拶に行くと「サブちゃん、すごいじゃないか」と。「最初、台本を見たとき、その役は小林稔侍がやると思っていたが、石倉ってあてびっくりしたよ。サブちゃん、書いてあってびっくりしたな」と。隣で何の関係もない潮が満ちてきたな」と。隣で何の関係もないマネージャーが号泣していました。

新幹線に乗って京都まで飲みに行くいまを楽しみ、さらっと生きるのが石倉流

木村　ご結婚されたのは三八歳でしたね。

石倉　僕は結婚しないと公言していたんですが、ほこりをかぶって、凍っているのをあるとき地方から帰って、自分の洗ったわびしくなりましてね。ようやく役者でいける目途もついたんで、結婚をすることにしました。だけど、結婚式当日にビールけしの離婚報道が流れ、記者はみんなたにマイクを向けて、さんざんな目にあいました（笑）。

木村　仲人を坂本九さんに頼んでおられたのに、その坂本さんが日航機事故で亡くなり、残念ながらそれは実現しなかったんですね。立会人が灰谷健次郎さん、武田鉄矢さん、そして司会はたけしさんと、まさに異色のキャスティングですね。

石倉　児童文学作家の灰谷先生には、武田鉄矢さんの番組で出会い、意気投合したんです。どんちゃん騒ぎもやりましたよ（笑）。

木村　そして、芸能界五〇周年で、『つむぐもの』（犬童一利監督）に初主演されたわけですが、ご感想は？

石倉　脳腫瘍で介護が必要になる頑固な和紙職人という役どころですが、主演だと責任が重く、お客さんは入ってくれるのかとか、どう演じたら伝わるのかとか、いろいろ考えることが多かったように思いますね。（高倉）健さんと（坂本）九さんには観てもらいたかったですね。

木村　石倉さんが書かれた『粋に生きるヒント』（ロングセラーズ刊）もいいですね。生きる上での教訓がたくさんありました。中でも面白かったのは、萬田久子さんから「橋爪功さんと一緒に飲んでいる。サブちゃんも一緒に飲もう」と京都から電話があって、その電話を切って、すぐに東京駅から新幹線で京都に行かれたというエピソード。その行動力って何なんですか？

石倉　行ける自分がうれしいんです。飲みに行くのに、わざわざ新幹線に乗って行く。「どうだい、おれも、ここまで来たぜ（笑）」。なにせ、生まれが貧乏でしたからね。あの日、京都の店に着くと、橋爪さんは「お前、あほか」と呆れ、萬田さんは「キャー」と叫んでいました。面白かったなあ。

木村　七〇代という節目を迎えて、これから、どういう人生を歩みたいと？

石倉　なんか、さらっとした感じで行きたいなと。仕事で役がどうこうというのも大事ですけど、そればかり考えていたら、人間が小さくなる気がするんです。僕は常に流されてきて、この年になっても、まだ人生を設計するという発想が無いんです。

木村　でも振り返ってみると、その時々で、いい人、すばらしい人のほうに流れ着いていますよね。

石倉　そういう方々に出会いたいという気持ちはあるのかもしれませんね。僕は、ただ、映画が好きで、役者になりたいという気持ちだけでやってきただけなんで、これからも、こうして、ああして、というのは無いでしょうね。

　そういう淡泊さ、無欲さが、健さんやいろんと出会えた理由かもしれませんね。

　僕には、「いざとなったら何とかなる」という気持ちがあるんです。だから、いざとなってもいないのに、無駄なことは考えまいというのが僕なんです。高倉健さんが亡くなったときに、「あ、人って死ぬんだな」と思いました。人間たいしたことないなとも……。いまどうやって生きるかと悩むより、きょう、どこで飲もうかなというほうが楽しいじゃないですか。これが芸能界を流れて得た僕の哲学かもしれませんね（笑）。

木村　実に、深いですね。本日は貴重なお話をありがとうございました。

対談後記

「すべての人は、自分のミッションを持って生まれて、成功している人というのは、そのミッションに気づき、それを達成するために努力している人」なのだという。そのためには次の二つのファクターが必要で、「正しい場所にいること」と「それを実現できる場所で努力をすること」なのだとか。石倉さんの著書にある「棚からぼた餅は、落ちる場所に居なけりゃなんない」や「プロ意識は泥の中でつかめる～泣きは入れるな、てめえで選んだんだろ！」という言葉は正にその芯を突いたのであると思う。「四十七人の刺客」や「下町ロケット」で観かける事はあっても、実際にお目にかかったのは三〇年ぶりのこと。過ぎし日の懐かしさと、石倉さんの口調で語られる、波乱にとんだヒストリーの面白さに惹かれてお話を伺ううち、いつもの倍以上の時間を費やしたことに気が付いた。「経済的には最悪だったけど、愛情はたくさんもらいました。グレなかったのはそのおかげです」とおっしゃっているが、たくさんの人から愛情をいただくことができたのも、石倉さんの心に秘めた真摯な思いが、それだけ周囲の人の心に届いたからなのだと思う。これからは「路傍の徒花でいい」などと言わず、どうか「大輪の花」を咲かせて欲しいものだ。それにしても、一番話の盛り上がった甲府での武勇伝、書けなかったことが本当に悔やまれる。面白かったんだよなぁ、この話！

日和 にっぽん

奈良 奈良市

東大寺の大仏殿には、年間250万人以上が訪れます。奈良の大仏さまの正式名称は「盧舎那仏（るしゃなぶつ）」。飢饉や干ばつなどが相次いで社会が混乱に陥った奈良時代、聖武天皇は国家鎮護を目的に、盧舎那仏を建立しました（解説はP14に続く）。

カメラ／渡邊春信　ライター／吉田彩乃　デザイン／北川原由貴　プロダクションマネージャー／池田大作　スペシャルサンクス／奈良市・株式会社トヨタレンタリース新大阪

後援／観光庁 Japan Tourism Agency

歴史ある神社仏閣の街、奈良

古都・奈良、とも言われるように、奈良は歴史の深い街。千年以上続く神社や寺が多く、世界遺産に指定されている場所が多いのも魅力です。

安寧を願って建立された東大寺と盧舎那仏

奈良時代は飢饉や大地震など凶事が相次ぎ、混乱した時代でした。このような社会状況を背景として、聖武天皇は国家鎮護のため全国に国分寺・国分尼寺の建立を命令。東大寺は国分寺の中核とされました。

大仏さま（正式名称は盧舎那仏）の造立には全国各地から材料が集められ、多くの人々が協力しました。「苦難を乗り越えるには、人々が心を一つにしなければなりません。大仏さまを造ることだけが目的ではなく、その過程によって人々が心を一つにすることが聖武天皇の願いでした」と、東大寺録事、東大寺塔頭宝珠院住職の佐保山暁祥さん（左写真）が教えてくださいました。

華厳宗大本山　東大寺
奈良市雑司町406-1

東大寺大仏殿の中で、大仏さまに次いで参拝客の人気を集めているのが「柱の穴」。大仏さまの鼻の穴と同じ大きさで、この柱の穴をくぐり抜けると無病息災のご利益があると言われています。頑張れば大人でもくぐり抜けられる大きさ。ぜひ試してみてください。

東大寺の正門である南大門の両脇には、高さ8.4mの巨大な金剛力士像が2体安置され、境内を守護しています。鎌倉時代の仏師、運慶、快慶らの作とされ、口を開けているのが「阿行像」（①）、口を閉じているのが「吽行象」（②）です。

①左から興福寺・執事長事務取扱の夛川良俊さんと大森俊貫さん。②五重塔初層内陣＜西＞の阿弥陀如来三尊像。③五重塔は、優れた耐震構造が有名。基壇から心柱が貫かれ、ここに5つの独立した層が積み重なっているため、各層がバラバラになるのを防いでいます。

国宝の五重塔と三重塔を共に有する唯一の寺

興福寺は、中臣（藤原）鎌足を起源とし、藤原氏の氏寺として興隆しました。

国宝に指定されている五重塔は、730年、興福寺の創建者である藤原不比等の娘である光明皇后によって創建されました。その高さはなんと50m。5回の被災・再建を経た後、現存しているものは1426年頃に再建されたものです。初層の東に薬師浄土変、南に釈迦浄土変、西に阿弥陀浄土変、北に弥勒浄土変を安置。普段は一般公開されていませんが、今年8月26日から6年ぶりに公開されます。

さらに、同じ時期に寺内最古の建造物であり、国宝の三重塔も公開。三重塔の初層内部には仏や菩薩が千体ずつ描かれ、東の須弥壇には弁才天像と十五童子像が安置されています。

2つの塔の同時公開は初めてということで、大変注目されています（三重塔の公開は5年ぶり）。国宝の五重塔、三重塔を共に有するのは全国でも興福寺だけ。古都奈良のシンボルであると同時に、誇りでもあります。貴重なこの機会にご参拝してみてはいかがでしょう。

①木造千手観音菩薩立像。あらゆる方法で人々を救う観音菩薩の慈悲を象徴していると言われています。②乾漆八部衆立像の一部。インドで古くより信仰され、仏教に取り入れらた八神で、向かって一番右が阿修羅像。※いずれも、国宝館で安置。

法相宗大本山　興福寺
奈良市登大路町48

屋根を貫いているのが樹齢600年のビャクシン（上写真右）。もともとまっすぐだったものが、雨や台風で倒れたと推測されています。並んで立つのは、なんと樹齢800年の杉（上写真左）。

春日大社
奈良市春日野町160

世界遺産「春日大社」

「春日大社は、今年60回目を迎える式年造替で賑わっております」と、ご案内してくださったのは春日大社主事の秋田真吾さん。

春日大社には3000基の燈籠があります。平安時代後半に武士や貴族が、江戸時代には庶民から奉納しました。全灯籠に一斉に灯がともるのが、毎年8月14・15日に行われる「中元万燈籠」。日も落ちきった19時頃、ほの暗い境内で煌々と灯籠が光る様子はなんとも幻想的です。

建物が全て東を向いていた商店街

東向商店街は、奈良市を代表するアーケード街。室町時代末期は、興福寺の門前町でした。当時は通りの東側が興福寺の境内で、西側にのみ建物が並んだことが、「東向」という名前の由来です。

左から鯖、鮭、鯛

右から順番に広報の西井理貴さん、山﨑さん、千々岩和美さん

柿の葉すし本舗 たなか なら本店
奈良市東向中町5-2

柿の葉の香りを楽しみながら

柿の葉すしは奈良県・石川県などの伝統食です。なかでも、奈良県は全国有数の柿の産地。江戸時代、紀州の浜でとれた鯖を塩締めして持ち帰り、身近な柿の葉で包んだことが発祥です。利便性から始まった手法ですが、柿の葉の豊かな香りと鯖の旨味が酢飯にうつり、三位一体の相乗効果も。店長の山﨑津代美さんは「柿の葉の香りをかいでからお寿司を食べてみてください」とすすめます。

左から、上平幹弘さん、店主の中谷充男さん、阪本雅章さん。

奈良・上北山伝統の高速餅つき

商店街の名物とも言えるのが、中谷堂の高速餅つき。道路に面した店内で、店主の中谷充男さんが「はいっ」という掛け声とともに、目にも止まらぬスピードで餅をつきます。パフォーマンスではなく、これは中谷さんの故郷・上北山村の伝統のつき方。蒸したての餅米を熱いうちに早くつくことで、やわらくコシのある餅に仕上がるのです。

高速餅つき・中谷堂
奈良市橋本町29

最高速で1秒2回のペースになる高速餅つきは、つき手と返し手の息を合わせることが重要。タイミングがずれると美味しい餅ができない上、危険です。

長期熟成のため、倉庫には樽がびっしり。フォークリフトを導入して徹底管理された蔵の風景は、迫力があります。

左から店主の今西泰宏さん、お父さまの康雄さん、お母さまの孝子さん。

伝統の製法を頑なに守り続ける奈良漬店

「清酒粕のみで長期間漬ける奈良漬けを作っている、日本で最後の一軒」と、店主の今西泰宏さん。6カ月前後、長くて1年半位しか漬けない促成品が多いところ、今西さんは先代の父から教わった、江戸時代の創業当初から続く製法を守り続けています。５回、６回と清酒粕の漬けかえを行い、長い年月をかけて野菜の塩分と水分を抜くため、一般のものより色も黒く味はまろやかで深みがあります。

株式会社今西本店
奈良市上三条町31

奈良ホテル
奈良市高畑町1096

日露戦争勝利を機につくられた宿泊所

奈良ホテルは、日露戦争に勝利した日本が、外国人を呼び込む目的で1909年に開業。国賓や皇族の宿泊する迎賓館に準ずる施設としての役割を担っていました。理論物理学者のアインシュタインやマーガレット英国王女、佐藤栄作なども宿泊し、彼が演奏した約100年前のハリントン社のピアノが今も保存されています。

奈良市観光経済部観光戦略課交流係の西手清英さん。一筋縄ではいかない鹿の扱いもお手の物。鹿の後頭部あたりならば、触れても鹿が嫌がらないそうです。

奈良に泊まる

歴史の奥深さと、豊かな自然をあわせ持つ奈良市ですが、『ホテル日航奈良』では、奈良を代表する、春日大社・東大寺・興福寺・金峰山寺（きんぶせんじ）の各4社寺をイメージしたコンセプトルームを用意しているのが特徴。各社寺をモチーフにした華倭里（かわり）あんどんが旅の疲れを癒してくれ、お部屋の中でも奈良を存分に満喫することができます。

ホテル日航奈良
奈良市三条本町8-1
JR奈良駅西口直結
TEL.0742-35-8831

ENDOU KYOKO

クロ 96ママメール
音時間
～ On Time ～

Act.73
「涼しい一曲」

紫陽花が主人公の梅雨が過ぎ、向日葵にバトンタッチ。「今日も暑いな～」から始まるこのシーズン、朝いちばんから蝉の鳴き声が賑やかですが、夕方の一刻、風に乗って聞こえてくる風鈴の音にもつい、遥く夏を感じております。地球温暖化の影響でしょうか……雨量や気温は劇的に変化しているようですが、お素麺も冬瓜も似合う今も昔も変わらない日本の風物詩、変わって欲しくないわ～。てな事を思いながら、でも正直、体はちょっとバテ気味……。こんな時は音楽のチカラも借りてこの残暑を乗り切りましょう！

ナイロン弦のクラシックギターと、ギターのボディを叩くスラム音。遣る瀬無いリズムとメロディーが心地良く体に押し寄せてくるようなボサノバのナンバー。「イパネマの娘」とか、セルジオ・メンデスを世界に知らしめた「マシュ・ケ・ナダ」……ちょっと粋な方にはお馴染みかと思われますが、今日は夏を送る思いを込めて「WAVE」を。

「WAVE」アメリカではあのフランク・シナトラもエラ・フィッツジェラルドもカバーしたボサノバの代表曲。ブラジルの20世紀時代の音楽を代表する作曲家、アントニオ・カルロス・ジョビンの名曲です。1950年代後半、ジョアン・ジルベルト、ヴィニシウス・ヂ・モライスなどと共に、ボサノバというジャンルを確立しました。1967年、彼がインストアルバムとして発表した「WAVE」のタイトルチューン。ポルトガル語では「君に伝えたい」という曲名となっています。彼の作品は情熱に溢れていて、60年代特有と言っても良い位、彼独特のポルトガル語で詞が綴られ、哲学的な言い回しで愛を語る「ラブ&ピース」の世界なのです。ポルトガル語で「新しい」という意味の「ノヴァ」という言葉をそのまま生かして、ボッサノヴァ＝ボサノバというジャンルが誕生しました。彼は作曲家・編曲家・歌手であり、ギタリストでもありながら、ブラジル政府の外交官、更にはジャーナリストも兼ねる偉才でした。

とにかくボサノバの誕生秘話には、沢山の方々の逸話が残されています。体と心に爽やかで心地良い「ボッサ」の代表曲に、暫しお耳をお傾けください。

♪「WAVE」～満ち干きする波のまま、僕を恐れずに愛してくれればいいんだ！　2人なら、きっと寂しさも溶けて行くだろう～♪

jazz&bar 96
http://jazzbar96.com/

Presented by 日交 Nihon Kotsu
www.nihonkotsu.co.jp

代表取締役社長の綿谷昌訓（わたたにまさのり）さん。趣味は写真を撮ること。

カラー筆ペンは大人向けの塗り絵にも使われ、海外でも人気です。

工場内での墨滴生産の様子。書き初めの準備をする年末の繁忙期の生産量は、通常の倍になるとか。

創業114年、墨・書道液の老舗

書道の授業やご祝儀を贈る時、誰もが一度は呉竹の商品を使ったことがあるのではないでしょうか。全国の墨の需要の約95%が奈良で作られており、その中心でもあるのが呉竹。1902年、製墨業を営む会社として創業しました。現在も墨、書道液、筆ペンの技術を生かして様々な商品を開発しています。近年、人気を呼んでいるのが、カラー筆ペン。しなやかな書き味と繊細で美しい色合いやカラーバリエーションが魅力となり、アメリカやヨーロッパなど海外にも展開しています。

呉竹
奈良市南京終町7-576

歌謡曲を生み出し続けた土地、京終（きょうばて）

難読駅名で知られる、JR万葉まほろば線（桜井線）の京終駅。平城京の果てに位置したことが、地名の由来です。

「狂った果実」でデビューした石原裕次郎らを輩出したことなどで有名な帝国蓄音器（現・テイチクエンタテインメント）が1934年に設立されたのは、この京終駅の近くでした。創業者の南口重太郎（なんこう）が最初に立てた目標は、レコードを10万枚販売すること。自ら自転車を運転してレコードを運び、最寄駅から電車に乗って、大阪までセールスしに行ったことが記録されています。

京終駅周辺は今でこそ落ち着いた静かな場所ですが、レコードがまだまだ人気だった80年代前後はテイチクの奈良工場（※現在は閉鎖）もあり、賑やかな繁華街でした。

奈良工場での勤務経験のある奥谷禎章（おくたによしあき）さん（写真左下）は、当時の様子を知る数少ない社員のうちの一人。会社への愛着も強く、「当時の貴重なLPやテープは宝物」と語っています。

創業者の南口重太郎の似顔絵と、当時の帝国蓄音器ロゴマーク。

ビジョナリーな人たち

吉田利明 奈良唯一の“観光タクシー”ドライバー

奈良の良さを知ってほしい 豊富な知識でもてなす「観光タクシー」

「奈良県内で『観光タクシー』を名乗っているのは自分だけ」と語る吉田利明さん。奈良を愛し、良さを広めたいという一途な思いから、タクシーでの案内を通じて観光客を楽しませている。

吉田利明（よしだ としあき）
1949年奈良市生まれ。旅行会社勤務を経て、タクシー業界へと転身。2007年、個人タクシーとして独立。これまでの経験、資格を生かし観光タクシーを名乗る“走るソムリエ”としてマスコミでも紹介されている。

奈良県内を、ぴかぴかに磨かれた黒いレクサスが軽快に走り抜ける。クラスは最上級。車内は広々としていて、革シートはふかふか。ここまで快適な個人タクシーは珍しい。さらに観光に特化して営業しているのが特徴で、その名も「吉田個人観光タクシー」だ。

ドライバーの吉田利明さんは、2010年、奈良の歴史や知識を試す「奈良まほろばソムリエ検定」の最高位「奈良まほろばソムリエ」に合格した。興福寺などの有名どころから、知る人ぞ知る隠れた名所まで、吉田さんは乗客の希望に合わせて案内する。「奈良まほろばソムリエの会」の鉄田憲男専務理事は、吉田さんを〝走るソムリエ〟と命名。雑誌や新聞で取り上げられることも多く、吉田さんは今や引っ張りだこの観光タクシードライバーだ。

取材の日、吉田さんは東大寺の南大門より大仏殿の内側までレクサスで迎えに来てくれた。

各観光地で、車が入れるギリギリのところまでタクシーで入ってきてくれるのも吉田さんならでは。あらゆる場所の規制を把握しているそうだ。たとえば、桜の名所として知られる吉野山もかなり奥の方までタクシーで入れるため、お年寄りなど歩行が困難な人でも、負担を最小限にして観光を楽しめる。

「過去には、92歳の女性をご案内したこともありました。『いつもの旅行より疲れなかった』と言ってもらえましたよ」

単に案内するだけでなく、いかに快適に過ごしてもらえるかを、吉田さんは大切にしている。乗り心地のいいレクサスを営業車に選んだのも、市内の交通ルールを熟知しているのも、全ては乗客のためだ。

細部まで行き届いた心配りが評判を呼び、乗客にはリピーターが多い。口コミや紹介を通じて知られることもあり、数カ月先まで予約が多く入っている。

現在、吉田さんが乗せる乗客の8割が観光客。残りは、仕事で奈良に訪れた人への貸切運転や、あるいは企業の来賓の送迎用として予約が入ることが多い。いずれも、奈良県内で信頼されている証拠だ。

旅館からの一言で始めた観光タクシー

吉田さんが個人タクシーの営業を始めたのはいまから10年前。始めから「観光タクシー」と銘打っていたわけではなかった。だが、前職が旅行代理店の営業だったことや、自身が旅行好きなこともあり、観光客を乗せると自然と話が弾んだ。

「行き先を聞いて走るだけじゃなくて、自分から提案するのが好きなんです。お客さんに『興福寺に行きたい』と言われ、『お寺さんがお好きでしたら、他にこんないい場所もありますよ』とご案内したりしてね」

ある時、旅館で働く知人から「お客さんがエラい喜んではりましたよ」と、褒められた。その時、「観光タクシーでいけるんじゃないか」と思いついたという。「吉田個人観光タクシー」の始まりだった。

吉田さんに信念を尋ねると、間髪を入れずに「奈良の良さを伝えることが私の使命だと思っています」と答えてくれた。京都を訪れる観光客は多いが、それに比べると奈良まで足を延ばす人は少ない。2013年の年間観光客数を見てみると、京都市は約5200万人。奈良市はというと、約1400万人だ。吉田さんは、奈良にも京都に負けないくらい素晴らしい神社仏閣や自然があるのに、と嘆く。

「奈良県内のホテル・旅館の客室数は全国最下位。恥ずかしいと思いません？」

終始笑顔だった吉田さんが、急に真剣な顔つきになる。観光客を厚くもてなす一方で、地元の人々には手厳しく意見することもあるという。

「時には口うるさい運転手になることもありますよ。とあるホテルには、もっとサービスを改善すべきだと意見したこともあります。嫌われたっていい。それで観光客の満足度が増して奈良の人気が高まるなら、本望です」

奈良の観光タクシーのリーダー的存在

車の運転で欠かせないのが安全走行。吉田さんは、「30万キロ無事故表彰者」であり、安全運行指導員の認定も受けている。一般社団法人全国個人タクシー協会が実施する「優良個人タクシー事業者認定制度」では、最高位のマスターとして三ツ星を獲得した。

一方で、吉田さんのように観光タクシーとして仕事をすることに憧れ、吉田さんが所有する「奈良まほろばソムリエ」を受験するタクシー運転手も増えているという。しかし、合格率は約35％。マークシート方式の試験に加えて小論文まであり、難関なのだ。

車内に乗り込んでみて、すぐに目に付いたのが、奈良県のマスコットキャラクター「せんとくん」の顔の部分に吉田さんの顔がはめ込まれた合成写真だった。

「ドライバー仲間がね、似ていると言って作ってくれたんですよ」

と、吉田さんは笑う。観光客だけではなく、仲間からも親しまれていることがうかがえるひと時だった。

難関の最高位資格「奈良まほろばソムリエ」の合格証明書と認定証、バッジ。

◎木村の視点

同じ近畿の京都に生まれ、暮らし、職場が大阪だった私も、奈良の地を訪れたのは久方ぶり、どちらかというと、距離は近いが気持ちの遠い場所であった。閑散期に東山や嵐山で花灯路のイベントをやるなど、観光客誘致の努力を怠らない京都に比して、奈良という所は「大仏さんがいてはるから、お客さんはなんぼでも来てくれはる。そやから、何もせんでええねん」という「大仏商法」とも「奈良の寝倒れ」ともいわれる、おっとりした気質を備えているのが良いところでもあるし、はがゆさを覚えるところでもある。店は早く終わるし、宿泊者以外の客に対して、いささか親切さに欠けるような某ホテルの例もある。だが、それもホスピタリティ・マインドに溢れた吉田さんのように有為な人材が現れることによって、少しずつではあるが変わっていく気がする。奈良ファンを増やすための吉田さんのような活動が、更に大きな渦になった時、観光都市としての奈良は甦るような気がするのだが、「フレー・フレー吉田!!」

「ミシラン」…いいお店なのにまだまだ世間が魅力を知らない【魅知（みし）らん】名店を紹介していきます。

ファイブエル
ミシラン

奈良の郷土料理「茶がゆ」

味亭　山崎屋

「京都の白がゆ、大和（やまと）の茶がゆ」という言葉もあるほど、奈良県民にとって茶がゆは身近な食べ物だった。その歴史は古く、『古事類苑』によれば、聖武天皇の時代にはすでに茶がゆを食べていた記録がある。作り方には諸説あるが、ほうじ茶や番茶でさらっと炊き上げるのが一般的だ。

茶がゆを常食とする風習は、今や消えかけているともいう。だが、代表取締役専務の井上雅央さん（上写真・中央）には、家で当たり前のように茶がゆを食べていた記憶がしっかりと残っている。

「茶がゆは、夏の暑い時期には氷で冷やす食べ方もありますが、やっぱり、温度の熱い状態で汗をかきながら食べるもの、というイメージがありますよね。子どもの頃からずっと、そうやって食べてきましたから」

井上さんは昭和11年生まれ。明治初期に創業した奈良漬けの老舗・山崎屋をもとに、茶がゆを専門とする「味亭 山崎屋」を井上さんが開店したのは、昭和59年だった。

「新たに商品を作ろうとしたとき、すぐに思いついたのが茶がゆでした。お客さまに出すからには、ほうじ茶にもこだわることに。開店以来、京都・中尾園の香り豊かな茶葉を使い続けています」

山崎屋では、ほうじ茶にこんぶ茶のエキスを加えて、風味を豊かにしている。お茶漬けのようにさらさらと食べやすいが、食後には満足感も得られるしっかりとした味わいが特徴だ。白米は六分炊きで、程よい軟らかさ。ちりばめられた小粒の煎餅の食感がアクセントになり、食べ飽きない。

井上さんに信念を尋ねると、「奈良の味」を伝えること、と答えてくれた。

味亭　山崎屋
奈良市東向南町５井上ビル１階
【ＴＥＬ】0742-27-3715
【営業時間】11：15～21：00
【定休日】月曜（祝祭日、催事の場合を除く）

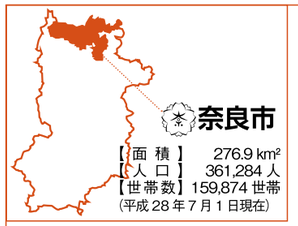
茶がゆ御膳　2160円
茶がゆ・八寸・小鉢・お漬物・わらび餅

市長からのメッセージ

奈良県奈良市長に市の魅力やまちづくりのビジョンをお伺いしました。

奈良県
奈良市長　仲川げん

「未来志向」の政策で奈良市を活性化する



奈良市
【面　積】　276.9 km²
【人　口】　361,284 人
【世帯数】159,874 世帯
（平成 28 年７月１日現在）

奈良にゆかりのある歌

「奈良の春日野」（1965 年）
1965 年に発表された吉永小百合さんの楽曲。

「昨日・京・奈良、飛鳥・明後日。」（1989 年）
さだまさしさんが歌う、修学旅行の定番曲。

「ムジカ」（2009 年）
谷村新司さん作詞・作曲・歌による平城遷都 1300 年祭のテーマソング。

奈良の「寝倒れ」

「着倒れ」「食い倒れ」と評される京・大阪に対して、奈良は「寝倒れ」と言われることがあります。これは「寝てばかり」と揶揄する意味ではなく、江戸時代、道端の鹿の死骸を興福寺に依頼して処理する際、費用は敷地の住民が負担しなければならいと決められていたため、早起きした住民が寝坊をした他人の敷地に移動させ、割を食わせたことに所以するそうです。現に奈良県の平均睡眠時間は神奈川に次いで２番目に短く、「寝てばかり」と誤解されたイメージを払拭するため、市を挙げて観光振興に力を注いでいます。

私は「未来志向」を大切にしています。２００９年に奈良市長に就任した時、私は33歳でした。政策の刷新や新しい街づくりに対する市民の期待が、若き市長を生み出したのだと思っています。

そこで始めたのが、未来志向の先行投資。そのうちの一つが、県外の人々を呼び込んで、一緒に奈良の街を盛り上げていく取り組みです。12年から始めた起業家支援事業では、県内外の若い起業家が商店街へ出店するための手助けをしています。若いアイデアを実現した、これまでになかった新鮮な店舗が増え、事業開始以来、街は着実に活性化してきました。中心市街地の23商店街の空き店舗率を見てみると、06年は６・９％だったのに対し、事業開始後の13年には４％に低下。店舗数にして約50軒増加したのです。この成功をもとに、今年度からは、新しいビジネスの創出と起業を目指す「プロデューサー育成研修プログラム」なども企画しています。

奈良と言えば歴史の街、というイメージをお持ちの方も多いと思いますが、奈良時代にはシルクロードを通じて世界各国の文化や文明が届けられ、刺激に満ちた国際都市として繁栄していました。仏像や社寺も「モノトーン」ではなく、もっときらびやかだったと聞きます。ずっと奈良で暮らしていると、ついつい固定観念に支配されてしまいがちですが、視点を変えることが大事です。

私は奈良の生まれですが、数年間、東京でサラリーマン生活を送ったことがあります。外に出てみて初めて、奈良の良さを発見できるようになり、その経験から、奈良の魅力のアピールには外部の人の視点が必要だと感じたのです。

未来志向の政策を進めるのと同時に、伝統を発掘し、アピールしていくことも重要です。実は奈良は、清酒発祥の地。室町時代に菩提山正暦寺で、酒粕と酒に分ける技術を僧らが確立し、透明度の高い「僧坊酒」として清酒を製造しました。そのため、正暦寺は「日本清酒発祥の地」と呼ばれるようになったのです。今年５月には、同じく発祥の地と言われる伊丹・出雲と組んで「清酒・日本酒発祥の地フォーラム」を開催しました。

今後は、先日閉鎖が決まった、明治時代に建てられた奈良少年刑務所のような古い資産をどのように活かすか、しっかりと取り組んでいきたいですね。